

第24回生駒市総合教育会議 会議録

1 日 時 令和4年11月28日(月) 午前10時～午後0時

2 場 所 生駒市役所 大会議室

3 協議事項

(1) 生駒市立生駒南小・中学校の今後の方向性について

4 市側出席者

市 長 小 紫 雅 史

5 教育委員会側出席者

教育長	原 井 葉 子		
委 員 (教育長職務代理者)	飯 島 敏 文	委 員	神 澤 創
委 員	坪 井 美 佐	委 員	レイノルズあい
委 員	伊 藤 智 子	委 員	古 島 尚 弥
委 員	吉 尾 典 子		

6 事務局職員出席者

教育こども部長	奥 田 吉 伸	生涯学習部長	八 重 史 子
教育総務課長	山 本 英 樹	教育指導課長	前 田 伸 行
生涯学習課長	清 水 紀 子	教育総務課課長補佐	石 田 昌 代
教育指導課課長補佐	花 山 浩 一	教育政策室長	日 高 興 人
教育総務課 (書記)	佐 竹 裕 介	教育政策室 (書記)	三 室 哲 哉
教育政策室 (書記)	松 田 美奈子		

7 傍聴者 12名

午前10時 開会

○開会宣告

○市長挨拶

小紫市長：教育を取り巻く環境がめまぐるしく動いていて、ICT教育、コミュニティスクール、いじめの問題、学校や家で生きづらさを抱えていたり、不登校問題、そしてSDGsはもちろん、大きな社会変化にどのように立ち向かい、受け入れながら、これから社会で頼もしく活躍をしていく子どもたちの成長にいろいろな要素を考えていく中で、教育大綱の中にもあるように、場所とか環境という問題が非常に重要になってくると思っている。

今回の南小・中学校の今後の方向性というのは、単に小中一貫とか義務教育学校をつくるというものを超えて、どういう学校だったら、どういう場所であれば、環境であれば、より子どもたちにしっかりとそれを実現していくための場所になりうるか、というようなことを考えて、実現していかなければならないことだと思う。

本日は、委員の皆様から、視察の様子や議論いただいている内容を教えていただきながら、より良い形の南小・中学校になるように意見をいただきたい。

○協議事項

(1) 生駒市立生駒南小・中学校の今後の方向性について

・生駒市立生駒南小・中学校の今後の方向性について、日高教育政策室長から説明【資料1】～【資料7】

(質疑)

小紫市長：これまでの過程についての意見を踏まえて、今後どういう方向性で成長していけば良いのか、それは建物や場所というハードの部分もあるし、それを活用したソフトの部分もあるかと思う。

【資料7】今後の施設の方向性について、学校教育はもちろんだが、それを超えて、学校教育と社会教育の融合、学校施設と地域との融合だということも書かれてあるが、今後、施設の整備にあたってのハード、ソフト両面の方針、こうなったら良いのではないかと、というようなところについて意見等いただきたい。

飯島委員：例えば、教育大綱の基本方針2「21世紀を生き抜くしなやかでたくましい人づくり」、この方針をどのように実現していくのか、ということについては、これから少子化になって子どもの人数が減っていくが、1人1人の子どもを大切に育てるということに尽きるのではないかと。

今行われていることで言うと、学級の人数を少なくすることで、1人1人の子どもに割ける時間を多くする。そのことによって大切に育てるということを一部実現できていると思う。さらに、学年を持ち上がる先生が、前年度に比べてこういうところができるようになった、あるいは今年度のつまずきは前年度のここに原因がある、というようなことを捉えることによって、1人の子どもの成長を通して見ることがができる。それを生駒市の小学校と中学校の義務教育段階の長い期間にわたって、通して見つめることによって、小学校でつまずいているところを中学校でどのようにサポートしたらいいのか。あるいは小学校で学んだことが、中学校でどのように花開いているだろうか。そうした姿を見ることによって、先生方に確信を持った指導していただく。そのためには、できる限り長期間にわたって1人の子どもの成長を見つめる、その縦の時間系列で大切に育てる視点が必要なのではないかと思っている。小中一貫校については、1人の縦の成長の過程を大切に見ている意味では非常に価値があるという考えである。

小紫市長： 説明会で話を聞いて、小中一貫校の意義がわかりにくい、小中一貫校は何がいいのかという質問があるように聞いているが、【資料3】で、北小中学校の校長先生の話はあるが、まだ経験していない保護者、子どもたちに対して、どう良さを伝えていくのか。実際にバスを借りて北小中学校に行ってみると、小中一貫がある程度わかってくるのではないかと思う。どのように学校の良さを分かりやすく説明ができるか、その関連で何か意見、補足があればお聞かせいただきたい。

伊藤委員： この前の教育フォーラムで草潤中学校という不登校特例校についての話を聞いた時に、確かこの学校の特徴で1番良いところというのが、自由に学習する場所を選べること、2番目がカリキュラムを自由に選択できること、3番目に、子どもが担任の先生を選べるということだった。3番目が特にいいなと思った。これから少子化に向かい、各学校のクラス数も減って、1学年1クラスになっていく中で、先生たちの負担が重くなる。これに対して、小中一貫校であれば、先生方の負担が分担しやすくなるだけでなく、子どもたちが会える大人の数というのが減らない、いつもたくさんの方が周りにいて、その人たちの中で自分が話しやすい大人、小さい頃からずっと見てくれる大人と、いつでも話ができる環境をつくることのできる。これは、とても良いことだと感じる。不登校の子が増えていく傾向にあり、そういう中で多様な大人が、多様な対応をしてくれる。それが少子化の中で、すごく大事になるのではないか。いろんな先生がいれば、大事なことを見落とす可能性も低くなる。また、中学校になって教科担任制になると、先生と子どもたちの心理的距離が開いてしまうことがあり得るが、小中一貫校では、小学校の家庭の延長のような温かい雰囲気と、中学校の授業の専門性の高さ、両方を

良い形で実現できるだろう。小中一貫校というのは本当に良いことしかないのではないかと非常に思う。

古島委員： どういう形で保護者の方等に理解していただくか、北小中の先生方に説明会で説明いただくだけではなくて、インタラクティブに、何かワークショップみたいな形で、自由に意見交換ができるような場ができれば良いのではないか。小中の9年間になると、教育内容のことや、こんなメリットがあるということは、【資料3】の中に書いてあるが、小学校と中学校の先生方の生徒指導面や、授業での乗り入れ、そういうメリットは私自身も中高一貫校に勤めていて感じている。だから、実際に子どもたちの成長を感じている保護者の方、先生方、この方々の意見を、もっと伝えていくことができれば、そういう場があればもっといいのではと思う。

吉尾委員： 子どもの立場に立って、経験ってどんなことなのだろうと考えた時に、子どもが自分を振り返り、どれだけ成長したかを実感することは、とても大事なことだと思う。6年生から中学校、幼稚園から小学校1年生、幼稚園でも年少って本当に小さい子扱いになってしまう。年上しかいない状況の中で、自分の成長を実感するために、やはり1年生から6年生の姿を近くで見ることができると、すごく有効ではないかと思っている。子どもが少なくなり、兄弟も少なくなる中で、いろいろな友達や年上の子と下の子、また地域の人を見て、自分はどうかののだろうか、自分はこれでいいのだと実感してくれるような学校であつたら嬉しい。成長というのは積み重なっていくものなので、1つ1つの経験が大事にされて、9年間終わって、次へステップアップしていく子どもたちを送り出していく、小さい集団から、もっと大きな高校という集団の中で、自分を見失わないように生活していくことには、いろいろな人に触れることの有意義さはあると思う。

飯島委員： 子どもたちの自己肯定感が足りないのではないかと、というような意見が時々聞かれるが、例えば小、中学校別で、6年生が中学校1年生になった時、自分は何もできないという印象を強く持ってしまう。それが小学校、中学校通して見た場合、低学年、中学年、高学年と段々いろんなことができるようになってくる。体力もついてくる。そして、今の自分がある。今の自分は中学校3年生ではもっと成長している。こういう確信が持てるということが、子どもの成長にとって自信に繋がる、自己肯定感に繋がるものと思っている。それから、小学校1年生の子どもから見た場合、中学校3年生というのは、ほぼ体格的にも知力、体力的にも大人とあまり変わらないように見えている。自分たちがそこまで成長できるという高い目標を得ることができるのではないか。その異年齢の集団が、相互にコミュニケーションを取るとは、同年齢の集団がコミュニケーションを取ること以上に、多様性が重視される社会にとっては、重要なことだと思うので、子どもたちに小学校1年生から中

学校3年生が、共に学ぶ場を提供することは非常に価値が大きいと思っている。

レイノルズ委員：小中一貫教育の推進や、もしくは中高一貫教育も、最近は奈良県内で増えてきていることは、中高一貫のメリットがあるからだと思う。それは選択肢だと思うし、そういう、いろんな選択肢があるということが大事で、各家庭やはり価値観は違うし、その子に合った学びというのもあると思う。いろんな選択肢があって良いと思っているし、小中一貫で学びたければ、この学校に行ったら良いとか、中学からもっと頑張りたければ違うところもあるという選択肢が増えることが良いと思う。今までは小学校、中学校と分かれていたのが、施設も1つにした小・中学校は、まだ生駒市は1つしかないのので、例えば南地区にもう1つ増やす、という、学校教育の選択肢を増やすという意味で、すごく魅力的な部分であると思う。

小紫市長：少子化、高齢化、核家族化が進む中で、子どもが異年齢の子どもたちといろんなコミュニケーションが取れる機会が増えること、長年の付き合いによって、理解してくれている先生方がいることで安心感もあるし、小学校6年生は、小学校の中ではリーダーをして、中学1年生になったら1番下という役割に急に変わる、いろんな意味でのギャップがおそらくあるのだろうから、小中一貫校になることで、役割的な面やギャップの面も、もしかしたら薄まったり、逆に良い関係ができるということもあるかと思う。

あと、先程あったように、校長先生のお話は、確かに聞きできているが、実際通っている保護者の方の意見を何か聞けるような場があるかどうか。もう1つは、例えば、北小中学校をオープンする日をつくって、南小学校、中学校の保護者にバスで行ってもらうような、そういう場で、先生方や保護者の方との意見交換であったり、子どもたちの様子を見たりというような機会があると、何よりも説得力があると思うので、とても良いのかと思う。

次に、この新しい場所をどういう場所にしていくのか、施設の方向性ということで、何かご意見いただきながら、その意見をさらに掘り下げていく形で協議できたらと思う。

飯島委員：学校の施設が小学校、中学校と別棟で建っていると、小学生は小学生、中学生は中学生という関係をあまり超えることができないと思っている。小・中学生が学校生活の中で、できるだけ多く出会うような、例えば小学校の子どもたちが中学校3年生の作品を見たり、作文を見たり、あるいは表彰状を見たり、そういう機会をできるだけ多く得られるようなスペースの共有が必要なのではないかと思っている。

それから、指導される先生方の側から言うと、小中一貫校でも施設が別の場合には、わざわざ校舎を出て小学校に、隣の小学校、場合によってはちょっと離れた小学校に行ってお前授業をしなくてはいけない。これは非常に先生

方の労力が大きいので、日常的に他のクラスに行く仕事と同じ程度の感覚で小・中学校の間を行き来できるような、そういう施設の一体性が重要なのではないかと考える。

小紫市長：そこについては、本当にその通りで、先程のメリットのところを具現化するための施設というものを考えると、そういう形にする他、選択肢がないとは思っている。

レイノルズ委員：先生方の負担であったり、子どもたちへの目の行き届きであったり、というその施設の共有化というメリットは大きくあると思うが、今後の方向性(2)にある「学校教育と社会教育が融合した活気あるまちづくりをする施設」、本当にこういった場所がつくることができれば素敵だと思っていて、やはり今多様性とか、インクルーシブとかいう世の中になってきて、建物も今後50年も見据えていかないといけない。どういう変化があるか、本当に見通しがつかない、10年先も正直わからないが、おそらく子どもたちの数は減っていくだろうという中で、今までのように小学校はこれ、中学校はこれ、公民館はこれっていうような、1つの役割だけを持った建物というのが、すごくもったいない。1つの同じ建物の中で、小学校教室、中学校教室の数が変わっていったり、壁の可動があり大きさが変わるとか、社会教育、せせらぎの機能を半分ぐらい持ってくるとか、立地的にすごく近いところに全てあり、理想的な場所にいろんな施設が揃っている。多様性を受け入れることができる柔軟性のある施設が、今後どの場所においても求められているのではないか。

小紫市長：今、おっしゃったことが、これからの教育とか学校施設のあり方ということで特に大きな議論のあるところかと思う。一回建てると、50年以上使う建物なので、そもそも学校という建物が、50年先本当に子どもたちが毎日学校に行っているのだろうか考えると、どんな建物が良いのか、答えが出ない世界だと思う。

ただ、小・中学校ほどいろんな設備、機能を備えた公共施設というのではなく、場所も良いところであって、ある意味最強の公共施設だと言っているのが、その割には1番使われてない。もちろん子どもたちの安全があるので、これは絶対に死守しないといけないが、同時に1番、使いきれてない施設であることも確かなので、これから子どもの数も減り、人口自体が減っていく中で、国がファシリティマネジメントを強く言われていて、だからこそ小学校、あるいは幼稚園の統合というもの、小中学校の建物、場所としてのあり方とこれからの公共施設、また民間の施設との融合等をどう考えていくか、がすごく大変で、この南小学校・南中学校をどう整理していくかということは、かなり大変なことだと思う。義務教育学校の小中建物を1つにしますということだったら、設計とかに関しては、そんなに難しいことではないかもしれないが、10年後20年後も何に使うかと考えた時に大変想定も難しいし、そも

そも考え方を変えていかなければならないし、そうするとやはり変わることへの心配の意見もあるし、安全面も出てくることをどのように考えていくか、ここはせせらぎの真裏にあるので、せせらぎの施設とこの学校と、どうブレンドさせていくのか、あと市全体でも、部活動とか、今は学校の外で学童をやっている例も増えているが、外部の方が学校に来て学童保育や部活動をしていただくということも考えていくと、学校教育と社会教育、そして学校と地域が繋がるという中で、どんなハードを整備していくのかということとは、北小中学校の時に考えたことと、かなり大きく違う学校の設計をしていかなければいけない、とても大きな事業だと思っている。

なかなか細かい設計とかの話はできないが、こんな機能がこれからの学校という場所に求められていくのではないかとか、そんな話をたくさんいただければ、実際の学校のあり方、その施設やデザインのあり方というものも非常に参考になると思う。

この間、ICTの教育アワードで文部科学賞が渋谷区だったが、渋谷区と生駒市では都市の制約とか学校の面積とかも違うので、全く同じ学校をつくろうとは思わないが、ウェブサイトで見ただけであれば、最新の学校を提唱している。このような内容に加えて、各学校においても、のびのびほっとルーム的な要素がないといけないはず。ボーダーレスになっており、ちょっとそこから辺の空間に集まって何かディスカッションしたり、グループワークしたり、そんな機能もあってもいいのではないかと考えていった時に、いろんな形の学校のあり方、さらに、地域や社会教育と融合した時に、どんな建物が、どんな運用ができるのか。もちろん管理もあるが、それをどうすればいいのかは、次の段階の考えで、設計やその前段階で時間がかかるのではないかと、思っている。とてもある意味で夢のある、デジタルだけではない、いろんな意味で最先端の学校で、場所としても学校の敷地だけではなく、周りにある様々な施設や人と一体となった、南小・中学校像ができると思う。そういう意味で、本日はそういう夢をここで出させていただく場かと思っている。

古島委員：最近、いろんな地域のコワーキングスペースがあって、そこにフリーランスの方や、いろんな職種の方、多様な働き方をされている方がたくさんいて、そこから自分も刺激を受けることが多くて、学校の中にそういう場所も地域の方々にも使っていただけたりするだろうし、学校教育にも興味があるフリーランスの方とか、コワーキングスペースを利用される方が登録制みたいな感じにして、状況に応じて、学校教育の方でも講演会を開くとかワークショップやるとか、その学校の子どもたちといろいろ関わっていけるようなものがあれば面白いと思う。

小紫市長：すべて安全とかセキュリティの話があるのは大前提に置いて、いろんな方と

関わることで子どもの成長にすごく繋がるということ、また、そういう場所が先生方にとってもすごくプラスにもなると思うし、学校こそ、他業種の方との勉強の場であると良いのではと思う。大人が学んでいる、先生が学んでいる姿を見せることができ、子どもがその後ろ姿を見る、そういう意味では学校という場所が、まさに大人や地域の方にとっても、学び舎にあることの意味がとても大きいと思う。

また、自治会館でも学びがあり、学校と地域の融合をしていきたいと思っているが、学校というのは、まさに最強の公共施設で子どもたちが大体歩いていける場所にある。平日にそういう方が働いている姿が子どもに見える。そのための図書館とか、そういう場所をどのようにデザインするか。

<渋谷区の「未来の学校」プロモーションビデオ視聴>

神澤委員：学校がアートなところ、出会いの場になったら良い。どの子どもも勉強できる場所がいいなと思っている。イメージは、図書館でおじいちゃんと子どもが本を読んでいたりと、子どもと一緒にスポーツをやっている。インクルージョンとか障がいだけじゃない、年齢を超えて、人が出会える場所、出会いと居場所としての機能を教育機関が持ってくると、いろんな人が一緒に運用し、いろんな方がいる、子どもたちだけだったらカバーできない時に大人がいて支えてくれたりすると、子どもたちはすごく安心安全である。それからもう1つの視点で言うと、不登校の一番の原因は、同一集団の緊張である。同じ学年で同じ年が一番しんどい。いろんな人がいる、いろんな受け手がいると、例えば、おじいちゃん、おばあちゃんがいてくれるとすごく良いと思う、更に言うと年齢を得た方々が孤独の問題も本当に世界中が抱えている。そういう方が学校に行くと、ちょっとホッとできて、1年生の子どもに食事の補助や、顔を拭いてやるとかできたら、ものすごく元気になる。一度に、たくさんの人が幸せになる可能性を持っていると思う。そんなものができたら良い。

飯島委員：将来的にそれはできたら良いという発想で設定しないと、できない空間になってしまうと思うので、是非そこは考えなければいけないと思っている。世代間の違いが、得られる空間として、学校がこれから機能していかないといけないのではないかと。例えば、生駒東小学校でも保護者の書道教室が行われている。その作品を子どもたちと共有することからでも始めることの意味があるような気がする。

小紫市長：南小・中学校は、予算をしっかりとっていききたいと思うが、他の学校も大規模改修、雨漏り制御とか地震に強いとか、そんな話はもちろんだが、そういう新しい教育をすべての学校でやっていく。また、図書館などの利用や学校

でのいろんな活動ができる、そういう場所にしていき、かつ1つ踏み込んだデザインとして、南小・中学校ができて、そういうモデルをさらにブラッシュアップしていきながら、次の小・中学校が整備されて、どんどん繋がっていかだろろうと思っている。

もう1つは、どうしても子どもたちのために何かをというように、学校の話をする時と捉えられがちなのだが、子どもたちに役割を与えることは、最初にあった自己肯定感に繋がっていかだろろうから、世代交流においてとても大切なのは、お客様を作らない、誰1人取り残さない。誰1人取り残さないためには、誰一人お客様にしてはいけなないと思っていて、障がいを持っている方も元気な人もおじいちゃん、子どもも、何かその場で役割がある、ちょっとした役割があるから、逆に助けてもらいやすい。子どもをお客様にしてしまうと、場所のレッテルを貼った瞬間、子どもは多分来にくくなる。なので、学校のいろんな機能をデザインしたり、何かソフトを考えていく中で、ただ子どもたちを救ってあげるとか、子どもたちのために何かしてあげる場所にしない、子どもに何かやらせることを常に考えながら場所をつくっていくことは、大切にしていきたい。

坪井委員：子どもたちのための学校の教育施設の充実と地域の教育環境が相乗的に向上するべきものというのは、学校という施設に付帯されている絶対条件だと思う。そしてもう1つ、子どもたちが学校にいる時間が学童や部活動などでどんどん長くなっている。そういった子どもたちが居やすい学校づくりが大事なことと、誰もが足を運べる地域の拠点ということで、その地域の人々の居場所になれるような学校づくりが必要になってくると思う。学校は、小学生も中学生も通える範囲にある。ということは、高齢者も通いやすい場所にあるということなので、地域の方々が何か用事がなくても行けるような、地域にある自分の行っても良い場所、居場所になれるような学校づくりができたなら良いと思う。例えば、どんどん高齢化が進んでいき、出かけられない高齢者の方々が、朝市に学校に行けるとか、メディアセンターがあったりだとか、地域の総合型スポーツセンターと共同して高齢化社会の中でも対応できるようなスポーツができる施設が併設されているとか、そういったみんなの居場所になれるような学校づくりができたなら良いと思う。

吉尾委員：地域の繋がりのある学校というのは、共感しているが、やはり学校で子どもが教育を受けていることありきで考えたい。公立小中学校は教育要領、カリキュラムに則って、それぞれの年代に応じた教育を進めている、ということを出しおかないと、何か地域みんなが出入りする場所になってしまい保護者の不安感に繋がってしまっははいけなないと思う。施設もみんな来て、いろんなことが変わったけれど、子どもは同じように学校に行っ、同じように教育を受けて喜んで通学できるということをしっかりと伝えることが

大事だと思う。これからの課題だが、学校ができた時点で、教職員の先生方が研修をして、基本の部分を共有していただく、それで保護者の安心に繋がるといようにしていくのが良いかと思う。

あと、音楽に特化した生駒市だから、音楽専用のホールが学校にあったら良い。それから王寺町の義務教育学校では、保健室がとっても広かったのも、それに合わせて、小さな診療所のようなものがあれば、子どもたちも安心だし、大きな災害があった時にも連携しながらもできるだろうし、地域の方も、ちょっとしんどい時に診てもらえる、感染や安全に留意し扉1つで繋がっている場所があればと思う。あと生駒山が間近にあるので、例えば1年生はここまで行った、2年生ならもう1つ進めて、中学校3年生は卒業遠足的な感じで、何10キロ歩くとか、小学1年生時はこれだけしか歩けなかったけど、卒業する時にはこんなにたくましくなっているという実感ができるような取組もあったら良いのではないかと思う。それから、自然から学ぶことは、とても多いと思うので、人工的なビオトープや大きな木、実のなる木があったり、動物がいたりとか、そういう環境もますます大事になるのかと思う。

小紫市長：1つは先程から言っている安全面は、誰でも、どんな内容でも、というのは、学校の特徴から無理で、やはり地域、保護者とかの一定の条件で、入る時間、場所等の工夫は当然いるということと、あとは、こういう地域の方とかいろんなことの繋がりが増えすぎて、それで何か今学んでいることがないがしろになるということはないように、ということはおっしゃる通りかと思う。ただ、もちろん学習指導要領に基づいてはやるが、先生が1人で子どもたち30人を教えている、今までの教育だけではダメになってきている中で、いろんな形の教育だったり、キャリア教育でSDGsとかデジタルとかを学んでいくのに、学校の先生だけから教わるということだけでは、時代としては相当しんどいかと感じているので、地域から学ぶ、また保護者から学ぶ、あと同級生から学ぶ、また逆に子どもたちから先生に教えるようなことができる場所があれば、とても子どもたちの自己肯定感を伸ばすことができるのではないか。きちんとコアの部分はやっておきながら、しっかり多様な学び、多様な関係性を学び、関係性をつくっていく、そういうことが必要なのだろうと思う。

診療所の話はとても面白いなと聞いていて、高齢者の方からが見れば、学校でも遠いという方がいるので、生駒市は自治会館をベースにそういう拠点をつくっていかうとしている。10分で行けるとところに自治会館があるという生駒市民の割合が85%以上ある、そういう場所で買い物ができたり、ご飯が食べられたり、キッチンカーや移動販売車が野菜も売りに来てくれるし、今考えているのは医療ケアで、保健師も月1回ぐらい自治会館に行ってくれる。自治会では、医者や看護師の診察を受けることはまだ難しいので、車がないと病院に

行けない。買い物は何とかできそう。移動販売車が来てくれる。医者も自治会館に来てくれたらいいが、今はそこまでまだできていないので、学校でそういうことができれば、中学校単位で災害の時に学校は避難所になるので、平時から診療をしていただくような機能があると面白い。今のお話はいろいろ考えていくに値する。

伊藤委員：保護者として、今の学校の現実を見ると、放課後に学校にいるのが学童だけになっている。学校によっては放課後に校庭をあまり使わせていないという、今ここで話し合われている理想とは、非常にかげ離れた現実がある。それには多分理由があるのだろうと思うので、先生たちだけで新しい学校をやらしてもらおうというのは多分難しいのだと思う。やはり建物としてはものすごくいろんな可能性に向けて開かれた建物、いろんな新しいものを創出できるような建物、そういう建物にしようということも重要だと思うし、そうした場所の魅力が現場の力を引き出してくれる面もあると思う。他方で、今現場の先生方や管理職の方々に、このような新しいコンセプトの建物や事業を管理していただくというのは、厳しいのではないか。建物や事業の管理者を別に設けるなど、みんなが楽しく安全に使える具体的な方策を今後示していくことで、保護者や先生方など関係者の不安が取り除かれていくことが大事かと思う。

それから、学校の中で子どもたちがスポーツや勉強をすることに加えて、創造性やアートという側面も視野に入れたらどうだろうか。私が子どものころ、公民館で楽焼きができる地域があり、1週目は形をつくり、2週目に焼き上げてもらったものに絵付けをするというような活動を楽しんでいる子どもを羨ましいと思った経験がある。そのような創作活動に日常的に取り組めるようなワークショップがあったら良いと思った。また、英検、漢字検定などへのチャレンジを支援するような企画なども、王寺の義務教育学校などでも実践されていたが、考えていけたら良いと思う。子どもたちの学びたい気持ちをどう活かすのか、外の力が入れれば可能性が広がるという部分は確かなので、手法を確立しながら、実現できたら良いと思う。

小紫市長：予算、人の話はもちろんこれから考えていく。アイデアが全部実現できるというのは難しいかもしれないが、今の時代のやり方としては、どんどん夢を言っていたら、できることから進めていきたいと思う。どう落とし込んでいくかというところでも、またお力をいただけたらと思う。

あとは英語だけでできれば良いということでは全くないと思うが、やはり英検とか TOEIC とか、関心がある保護者の方が非常に多いのは間違いなくて、学校の中でやっていくこともあるだろうし、放課後だったり地域であったり、いろんなところの力を借りてやる。学校で何をやるのか、生涯学習施設がどこでやるのか、もしくは今後、民間のプログラミングとかジムとかと、どの

ように連携していくのかということと全部学校の敷地内でやらないといけないのかとか、役割分担もあると思う。

坪井委員：ショッピングモールに人が集まるようになっている仕組みがあるとおっしゃっていたが、それはショッピングモールが人を集めるような仕掛けをたくさんして、小さな子が泣いて泣いていても許される、オムツを替えるスペースがある、子どもがぐずった時には、すぐに食べ物を買に行けたり、食べる施設があるなど、そういう付帯状況があると思うが、そういった部分を抜いても、生駒市の社会教育、公民館活動はすごく活発なので、そことの融合ができれば良いと思う。英語が堪能な方が多くて、英語を喋れる高齢者の方々が多くいらっしゃるサークルもある。絵画がすごく上手な方が多いサークルもあったりする。その公民館の施設を、学校施設の中に併設するようなイメージを持っている。豊中市の公民分館が学校の余裕教室を利用して行っているように、学校の中で、生涯教育の部分を、大人がやっているところを子どもが見る、その成果物を子どもが見るようなお互いが刺激し合えるような空間ができれば良いと思う。

小紫市長：逆に放課後、学童をせせらぎでするとか、需要はあると思う。素晴らしい絵を書く方や、英会話サークルでは、英語が上手な方がたくさんおられるのだが、そのサークルの外への広がり十分ではないのが勿体なくて、そういう方々の力を借りる場所としても、学校というのもあるだろうと思う。

神澤委員：子どもに何か教えてあげるとなるとしんどい。子どもと遊ばせてもらう、子どもから何か教えてもらうとすごく楽しい。

あと、訪問看護ステーション入れたらどうだろうかと思ったが、そう簡単にはできないけれども、フットワーク、緊急事態で小学校を選ぶかということ、広さとか、トイレとかの施設が整っている。多目的トイレをものすごく上質にすると高齢者の問題も対応できるし、オムツも変えられるし、オムツを変える年代のお母さんが動きやすくなる。多層的支援、1つの部署だけの教育だけで出来ないことが結構あるので、連携をする。カンファレンスにいろいろな人に入ってもらうように、1人の人を支援、サポートする時にすごく動きやすいし、現実的になっていく、そんな話し合いもここでしていけたら良い。

小紫市長：そういう意味では、学校の中で地域や、あとは生涯学習と社会教育との提携みたいな話がたくさん出てきて、医療福祉関係者や、保護者とのワークショップは必要だと思う。生駒市民のパワーを最大限使わせていただく。一方で、学校という場所が今までの枠を完全に取っ払ったらダメなので、どうことができるのかということを考えていく。アイデアをもらうことはとても大切なことだと思う。学校に医療施設というのも面白い。公園がちょっと遠い地域なら、学校で子どもを遊ばせたいと思うが、なかなか今は難しい。学校というのは何のための場所か、もちろん学校に来ている子どもたちが安全に成

長できる場所は、崩したらダメだが、今生駒市にいる子どもたちが成長するにあたって、今の学校の施設機能だけで本当にこれからの社会で頼もしく、優しく生きていけるような子どもたちができるかという、やはりいろんな方の力をもっと頼っていかないといけないのであれば、必然的に学校は相当開かれる部分が出てこなければいけない。今までとだいぶ価値観を変えていきながら、守るべきところは守って、変えるべきところは変える、そのぐらいのつもりで、この南小・中学校が目指していくことをやっていきたいと思う。

教育長： 今、子どもたちの意見を取り入れてという話があったが、実は11月の半ばにオンライン職業体験という出前授業で「私がわくわくする未来の学校」というのを3中学校12チームに提案をしてもらった。そしたら、今出ていた話がまさに出ていて、子どもたちの中で担任を選べる制度をして欲しいとか、自分たちが学びたい教科を自分たちでつくるか、そういうアイデアがあった。今日は学校の可能性というところで、委員の皆様また市長からたくさんアイデアを出していただいた。今後は、この教育大綱の目標に沿って、しっかりと皆様と夢を語りながら、そこから何ができるのか、子どもたちと同じ学びの中にまた地域、保護者の方々の学校づくりを共に進めたいと新たに決意した。

小紫市長： 本日はブレインストーミングに近い会議だったと思うが、いただいた意見を踏まえて、教育委員会の方でも、また南小・中の今後を考える会議でも、いろんな意見をいただいて、今後の方向性を決定していくということで進めていけたらと思う。説得力があると腹落ちするような機会をつくったり、保護者の方から意見をいただく話の場をつくっていただいたりすることももちろんやっていただきつつ、むしろ本当に皆様に意見をいただきたいのは、これからの教育とか、まちづくりというのを考えた時、この場所をどういうようにしていくのかというようなことを、もっといろんなアイデアをいただく場をしっかりと持っていききたいと思う。

それによって、学校自体はもちろん、社会教育との融合とか、地域との連携というものをしっかりとやっていき、結果として子どもたちが安心して、かつ多様な学びの中で、これからの社会を支えていける優しい子になっていくということかと思っている。

あと、校区の方向性では、事務局から小瀬町と壱分西の地域の子どもたちが生駒南中学校にも通えるような調整区域を設定するということの提案について、ご意見をいただきたい。

レイノルズ委員： 校区の見直しについては、もう何年も前から、地域の方から要望が上がってきたところで、そうした方が学校にとっても、地域の方にもメリットが大きいと十分感じられるので、なるべく早期に進めていただけたらと思う。

小紫市長：校区の方向性については、そういう形での調整区域を設定することが小学校、中学校の方でも良いと思っているので、これについては、私もこういう方向で考えている。まだ詳細については、教育委員会また事務局の方でも検討いただきたい。

○閉会宣告

午後0時 閉会